

転生令嬢は

乙女ゲームの舞台装置

として死ぬ…

わけには

いきません！



### ロキ

メルディーナの相棒の精霊。  
メルディーナのことが大好き  
で大切に思っている。

### リアム・アーカンド

獣人の王国の第二王子。  
穏やかで優しく、誠実な性格。

### ルーチェ

リアムの相棒の精霊。  
子どもっぽく甘えん坊  
な性格。

### メルディーナ・スタージェス

乙女ゲームの世界の悪役令嬢に転生して  
まった少女。少し気が弱いところがあるが、  
真っ直ぐで真面目な性格。



**ニール・キドニー**

クラウスの側近。体面を気にし、空気を読むタイプ。

**イーデン・スタージェス**

メルディーナの兄。自信がなく保守的なところがある。

**リリー・コレイヤ**

メルディーナと同じ転生者で、乙女ゲームの世界のヒロイン。可愛い見目に対して、エゴイストであざとい性格。

**クラウス・セイブス**

セイブス王国の第一王子でメルディーナの婚約者。王族としての意識が高く、実直で堅物。

**登場人物  
紹介**

Characters



転生令嬢は

乙女ゲームの舞台装置として死ぬ…

目次

プロローグ：運命の分岐点	006
第一章	010
第二章	047
第三章	077
第四章	107
第五章	159
第六章	182
第七章	202
第八章	251
エピローグ	300

わけにはいきません！

星見うさぎ  
Hoshimi Usagi

★ イラスト ★

花染なぎさ  
Hanazome Nagisa

## プロローグ…運命の分岐点

五歳の私はその日、侍女のサリーと一緒に街に遊びに出かけていた。

ずっと行きたいと思っていたお店の少し手前で馬車を降り、さあ店の中に入ろうかと思ったその時。悲痛な鳴き声が耳に飛び込んできたのだ。

「キャンキャン——……！」

「おわっ！ きたねえな！ この忌まわしい獣めっ！」

「どこから入り込んだんだか……おーい、誰か、衛兵を呼んで来い！」

「チッ！ せっかく美しい広場の石畳が……汚れた血がついてしまってるじゃないか……！」

思わず視線を向けると、そこにはボロボロになった小さな犬のような生き物。血で汚れていて、はつきり何の生き物なのか分からない、ひどい有様だった。

「お母さん、何か転がってるよー？」

「しっ！ 見てはダメよ、あれは不浄ふじようの生き物だからね」

「不浄ってなあに？」

「とつても汚くて悪いものという意味よ」

「ふうん……？」

その時、人に避けられ、歪んだ表情を向けられているその生き物が、一人の少女の足元に縋りつこうとした。とても身なりの良い少女だ。私と同じ、貴族のお忍びだったのかもしれない。

「お嬢様……?」

サリーの怪訝な声も聞こえないほど、私はなぜかその光景から目が離せなかった。

(ああ、あの子はあの女の子に助けられるんだ、よかった)

そう思い、ほっとしたのも束の間――。

「やだ、止めて、触らないで！」

「キャンッ！」

あろうことかその少女は、汚れ、ボロボロになったその生き物を強く蹴り飛ばしたのだった。咄さだったのかもしれない。それを咎める者は誰もおらず、むしろ誰もがその少女に同情するような視線を向けていた。

「お嬢様！ 大変です！ 早く屋敷に戻り今すぐ全てのお召し物を焼きましょう！」

「きゃー！ ブーツに血が付いたわ！ やだやだっ！ 替えの靴を早く用意してっ」

その言葉に側に控えていた従者らしき少年がすぐに走り出す。

「あのお嬢ちゃん、かわいそうに……」

「誰か早くアレを始末してくれないかしら」

「誰も不浄のものに触れたくないからなあ」

「衛兵はまだなのか？」

「クーン……」

悲しい声でひと鳴きして、その生き物はぐったりと体を横たえた。誰もが遠巻きにし、興味を失ったかのように目を逸らす。

この国で、怪我をした獣は厄災を呼び込む不浄の生き物として忌み嫌われる。そもそも食用や家畜以外の動物は基本的に受け入れられない国なのだ。そのためこの国に、人に管理されている以外の動物が入り込むことはほとんどないのだけ……。

距離もあって、間に溢れんばかりの人の波。ここは王都の中心街でありたくさんのお店が立ち並ぶ人気の通りだから。それなのに、そんな人、人、人の合間を縫うように、覗き見えたその生き物と目が合った。

遠くからでもよく分かった。綺麗な金色の瞳……。

その瞬間、心臓がドクンと大きな音を立てた。

「お嬢さまっ!？」

サリーの叫びを背中に、私は瞬間的に走り出していた。どこかで冷静な自分もいて、持っていたストールをフードのように頭からかぶる。自分の立場とこれからしようとしていることを考えると、幼心に私が誰であるかを知られるのは良くないと思ったのだ。

周りの声はもう聞こえなかった。

まるでぼろ雑巾のように転がるその生き物を抱え、そのままその場を走り抜ける。護衛は慌てているだろうけれど、心の中で「ごめんなさい」しながら認識阻害の魔法を自分にかけた。

そうしてひっそりとした人気のない路地裏までたどり着くと、そっと治癒の魔法をかける。

荒い息が徐々に落ち着き、瞬がゆっくりと持ち上がる。綺麗になつたら分かった。この子は

おおかみ  
狼だ。

じつと見つめるその瞳。

綺麗な綺麗な金色の瞳から、しばらく目が離せなかった。

私は知らなかった。

この出会いが私の運命をすっかり変えてしまうことも。

それにより、信じられないような悪意を向けられることも。

自分が特別であり、数年後に王宮で予言される『精霊王の代替わり』に大きく関係していることも。

この時の私はまだ、何も知らなかったのだ。



「もう！ これで何日目？ この時期にこの辺りで攻略対象の一人と出会うはずなのに……どうしてどこにもいないの？ このままじゃ回想で語られる『思い出の出会いイベント』がこなせないじゃない〜！」

すぐ近くで一人の女の子が訳の分からないことを捲<sup>まく</sup>し立てていたことも、私は知らない。

## 第一章

聖女様が初めて王城へ上がられる日。私——メルディーナ・スタージエスは、謁見の間で殿下の婚約者として立ち会った。

麗しい姿を初めて拝見したその日が、私の運命の日になった。

「お初にお目にかかります、リリー・コレイアと申します」

礼儀半分、あとは愛嬌あいきょうでなんとかするとばかりに、にこりと笑った聖女様。

愛くるしい茶色の瞳がこちらを向き、目が合った瞬間、全身に電流が走ったかと思うほどの衝撃！

次の瞬間、頭の中に異様な映像が濁流のように駆け巡った。

見たこともない景色、大きなものから小さなものまで鉄の塊かたまりがたくさん出てきて、でも私はそれを知ってるの……ありえないほど短いスカート、あれは『制服』だ。小さな部屋で小さなテーブルで、だげどびっくりするほど温かい食卓。人の顔ははっきり見えない。ああ、見たいな。懐かし  
いのは覚えている。誰だっけ、どんな顔だっけ、お願いだからまた皆の笑顔が見たい………。

——思い出した！

そうか、これは、前世の私の記憶——



ぽうぜん  
呆然と、手足の先が冷え切って、指をほんの少し動かすこともできない。こちらを見て、心底嬉しそうににんまりと笑った聖女様。私はその姿をよく知っている……ずっと、ずっと前から。

前世から。

気がつけば、私は屋敷に戻り、自室のソファに一人座っていた。

この屋敷の中に私を気に掛ける人は誰もいない。今まではそれを随分寂しく感じていたけど、今はそのおかげで、一人でゆつくりと頭の中を整理することが出来た。

ここは……ここは、前世で流行った乙女ゲームとよく似た世界。私はこの『あなたに捧げる永遠の愛』というゲームの世界に生まれ変わってしまったらしい。

私、メルディーナ・スタージェスは現在十六歳だ。母親譲りのハニーブロンドの髪に神秘的なアメジストの瞳が少しだけ自慢。

四つ年上に兄のイーデン、一つ年下に弟のエリックがいて、父は王宮での仕事が忙しく家にいることはあまりない。お母様はもう亡くなってしまった。

そして私は、聖女様に嫉妬して嫌がらせを行い、それがエスカレートしてその命を奪おうとしたことで処刑される、いわゆる悪役……。

「嘘でしょ……?」

私の役目はそれだけではない。

私が死ぬと、愛されず蔑ろにされ続けた私がこの身の内にためた絶望と憎悪が命の終わりとともに吹き出し……一体どうしてそうなるのか、代替わりを控え力の弱まっていた精霊王が私の生んだ瘴気にのまれて死に、その影響で魔王が復活するのだ。

いや、死んでまで悪役として仕事しすぎでしょ……。

私の死はゲームの前半から中盤の時期。障害である私がいなくなると攻略対象は一気にその仲を深めていく。そして時間差で魔王復活のタイミングはハッピーエンド一步手前。最後の一盛り上がりのスパイスでしかない。そんなのなかったってヒロインは誰とでも結ばれるだけ愛を向けられるし、聖女なのだから誰と婚姻することを選んだって反対もない。ただ皆の憧れ度と、名声アップが約束される。

そのための代償が大きすぎるわ……。

復活した魔王は聖女様が、それまでに紆余曲折を経て愛を育んだ、彼女を愛する素晴らしいヒーローたちと共に討伐する。それからその聖なるお力と愛のパワーで次代の精霊王を誕生させるのだ。

ゲームではその後平和になった世界で、相手を一人選び結ばれてハッピーエンド。

攻略対象は四人。私の婚約者でこの国の第一王子クラウス・セイブス殿下、私の弟であるエリックと、幼馴染で殿下の側近の騎士ニール、そして隣国の獣人。お相手に選ばれなかった後もそれぞれ全員が彼女に永遠の愛と忠誠を誓い、誓いの通りに生涯彼女を守り続け、誰一人伴侶を持たない。ちなみに殿下はその場合、なんと王位継承権を第二王子に譲るのだ。次期国王が妃を持たないなんてありえないからね。まさに人生をかけた愛。このゲームのそういうところが人気だった。選ばなかった相手もずっと自分を好きでい続けてくれる。

あまりの人氣に、乙女ゲーム好きの友人に勧められてメインルートの王子攻略だけプレイした。確かこのゲーム、裏設定が凄いと評判になり設定集も出たはずだけど……正直私はこれくらい基

礎情報しか知らない。

ただ、ひとつだけ確かなこと。

私は……彼女が最高に盛り上がった状態で幸せなエンドを迎えるための、いわば舞台装置……。



私とクラウス殿下が婚約したのは私が四歳の頃。殿下はお兄様と同じ四つ年上だ。輝くサラサラの金髪、落ち着いた深い海のような藍色の瞳、『一目見るとみんな恋に落ちる』と言われるほどの美貌で、ゲームの中でも一番人気だった。お兄様と殿下、もう一人の攻略対象である騎士ニールは幼馴染だ。

スタージェス侯爵家は家格こそ上位であるが、その実『可もなく不可もなく』という存在。より上位の公爵家にはもちろん、一見同格である他の侯爵家より権力を持っているなんてこともない。昔からの歴史ある家だということだけが自慢の我が家。

じゃあ、なぜそんなスタージェス家の私が第一王子殿下の婚約者に選ばれたのかって？

「姉上、早くしなよ！ 今日日はクラウス殿下とのお茶会だろ！ 全く、唯一買われた治療の能力ももうない無能のくせに、本当に愚図なんだから」

ブツブツと忌々し気に吐き捨てながらこちらを急かすのは弟のエリック。小さな頃は何をしても私の後について回る可愛い弟だったけれど、もうずいぶん長い間その笑顔を見えない。

可もなく不可もない家柄なのに第一王子殿下の婚約者に選ばれた理由。それは私がほんの小さな

頃から稀有な『治癒魔法』を使えたから。

——でも、それも昔の話。どうしてなのかは分からない。昔はいくらでも、どんな傷でも一瞬で癒すことのできたその力は次第に衰え始め、今では全く使うことができなくなってしまった。

そりゃ、こんな無能でお荷物な姉、嫌いになるに決まっているよね。

エリックの、お母様譲りの私ともよく似た紫色の瞳には、いつだって蔑みの色が浮かんでい

る。  
前世を思い出した今でこそ冷静でいられるけど、それまでは随分エリックの顔色を気にして傷ついていた。

「全く、殿下もおかわいそうに！ 本当はさっさと姉上なんかとの婚約を破棄したいだろうに。はつきりもう価値がないからという理由で破棄してくれて構わないのね！ スタージェス侯爵家には僕がいるんだから」

フン！ と鼻を鳴らして吐き捨てる。

あえて破棄という強い言葉を使うあたり、エリックがいかにか私を嫌っているかがよく分かる。もし今婚約がなくなるとしてもせいぜい解消がいいところなのに、わざと嫌な言い方を選んでるのだ。我が弟ながらちよつと性格悪いぞ、お姉ちゃんは悲しい。言えないけどね。

身内の鼻屑目を差し引いても天才のエリック。火・水・風・土の四大属性の全ての魔法を使いこなし、魔力量も膨大だ。確かに、この弟がクラウス殿下の側近になれば、スタージェス侯爵家としては王家との繋がりを保てる。天才の弟は無能な姉の存在が許しがたいらしい。

私だって、すぐにこの婚約はなくなるものだと思っていた。それなのに今もまだ解消されていない

い。

きつと、婚約を結ぶことになった経緯が問題なのよね。

それはまだ私が四歳になったばかりの頃。

お兄様とクラウド殿下、キドニー公爵家の次男でもあるニールはよく王宮で遊んでいた。私もお兄様について一緒にその場にいることが多かった。もちろん、八歳の男の子の遊びについていけるわけもなく、わけもわからずその場にいるだけだったけれど。ちなみに三歳のエリックはその時一緒にいなかったと思う。

ある時に遊びで三人は木に登り、クラウド殿下が誤って二メートルの高さから落下し、打ちどころが悪く、大けがを負ったのだ。

考えるよりも先に体が動いた。真っ青な顔で涙を浮かべるお兄様とニールを押しつけ、すぐにクラウド殿下の怪我を跡形もなく癒して見せたのだ。

当時まだ小さな子供。

『痛そう！ 血が出てる！ 治してあげなくちゃ！』

そんなとても単純な気持ちだった。

王家から何度も婚約を打診されることになったのはそのすぐ後だった。

そんなふうには王家からの申し出により結ばれたこの婚約を、私が無価値の無能になったからとなかったことにするのは外聞が悪いということなのだと思う。それともヒロインである聖女様が現れるまでは婚約解消になるはずがなかっただけだと思えばいいか。

ちなみに、ゲームではそんな事情は一切出てこなかった。舞台装置でしかない私の過去など何も

語られないのだ。それこそ設定集には何か書かれていたのかもしれないけれど。

婚約こそ解消されはしないものの、クラウス殿下はエリック同様、今の私に冷たく当たる。

今でこそもう慣れたし、記憶が戻った今となっては納得の現状ではあるんだけど。私と仲が良かったら、殿下がヒロインと恋に落ちるのは完全なる浮気野郎だもんね！（婚約者がいる時点かどうかとは思うけど）

だから……私の初恋が、クラウス殿下だっていうことは墓場まで持っていくと決めている。

王宮に着き、馬車を降りるとニールが迎えてくれた。

「メルディーナ、俺が庭園までエスコートするよ」

今でも変わらず接してくれるのは、この年上の幼馴染だけ。なんて寂しいことかしら？

ニールはクラウス殿下の側近として、二十歳になった今では近衛騎士になっていた。そして、こうしてよく私の王宮でのエスコートを買って出ってくれていた。……クラウス殿下は決して私を迎えに来ないから。

「ありがとう、ニール。いつも助かるわ」

「お安い御用だ。さあ、行こう」

ちなみにお兄様はクラウス殿下の側近にはなれなかった。魔法の才がなかったのだ。この国の貴族は魔法が使えるかどうかがとても重要視される。これでスタージェス侯爵家には私とお兄様、才能を持たない子供が二人。父は才能あるエリックだけかわいがり、エリックはお兄様のことも馬鹿にしている。

お母様が生きていて私がまだ治癒を使えた頃。まだ私はお父様の自慢の娘であり、エリックにとつても自慢の姉だったと思う。家族みんなが仲良く過ごしていた。いつでも笑顔が絶えなかった。

お母様が病気で亡くなったのは、私が六歳になり、治癒の力をなくして少し経った頃のこと。

『お前の治癒が今使えれば……肝心な時に役立たずめ……!』

お母様を心から愛していた父は私を憎んだ。そうしなければ喪失感に耐えられなかったのかもしれない。あの瞬間から私は、愛されない『スタージェス家の無能な娘』になった。

お兄様も多分私を嫌っている。正確には無関心だ。どうしてだろうと悩んだこともあったけれど、同族嫌悪というものに近いのかもしれない。きっと自分と同じく才能を持たない私を見るのが辛いのだらう。

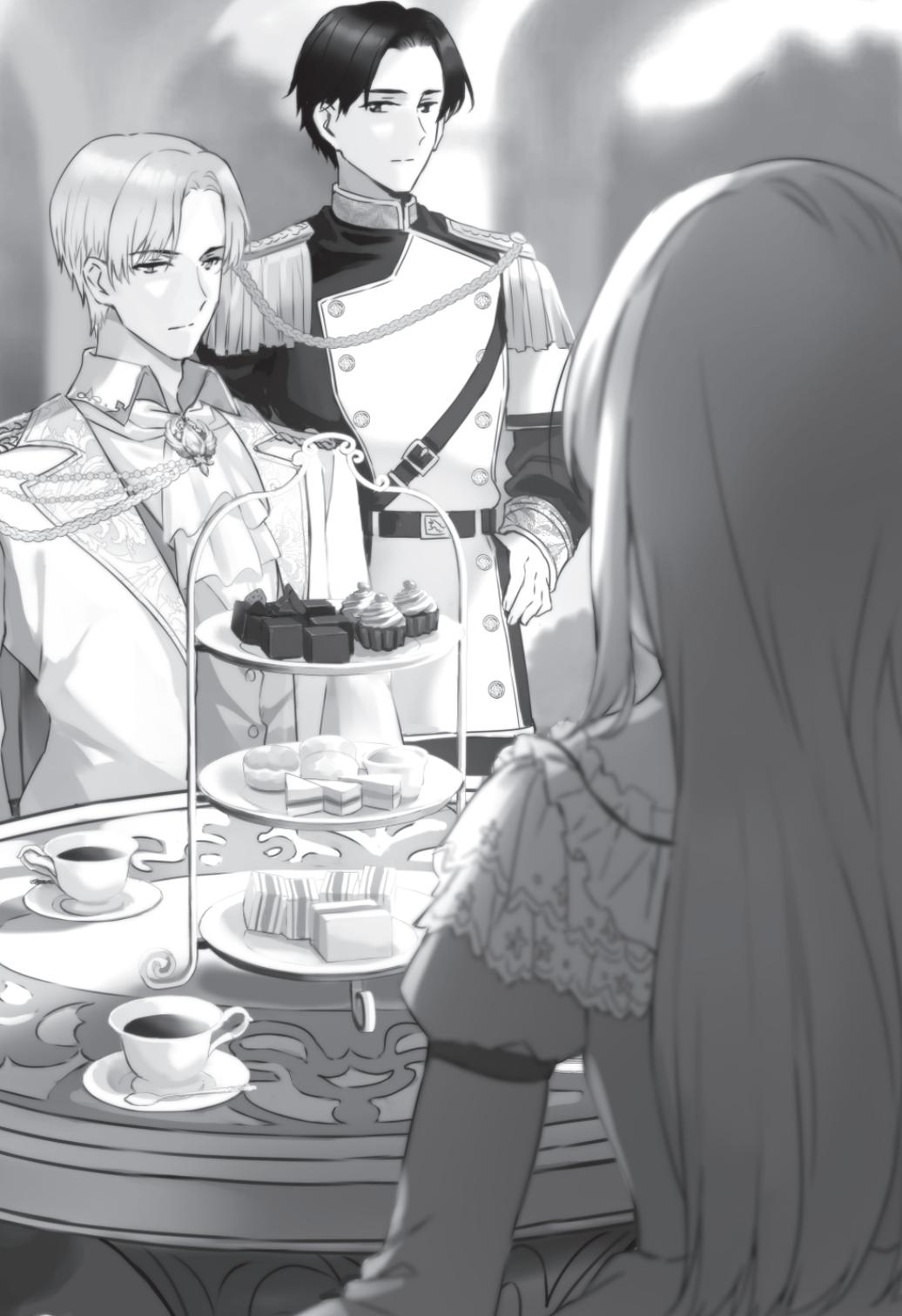
ニールのエスコートでお茶会の準備が整った庭園に入る。クラウド殿下はすでに席に着き私の到着を待っていた。ちらりと一瞬こちらを見てすぐに目を逸らす。表情が厳しい。これもいつものことではあるけれど、私はいつも傷つくのだ。毎回懲りもせずに沈んだ気持ちになる。心の中でため息をついた。

「殿下、お待たせして申し訳ございません」

そう言いながら、礼をとる。

「……ああ」

返ってくるのはそっけない一言だけ。重く苦しい雰囲気でお茶会が始まった。これは一応婚約者としての交流のために設けられた時間なのだけど……とてもそんな和やかな空気ではない。クラウド殿下もきつと嫌でたまらないのを我慢して席に座ってくれているのだ。



小さな頃はこうじゃなかった。

お兄様と、クラウド殿下と、ニール。幼馴染の三人について回って、皆私を可愛がってくれた。婚約したばかりの頃はクラウド殿下も『メルディーナと婚約できて嬉しい』と言ってくれていた。嘘だったのかもしれないけど。それでもそうやって笑ってくれる程度には大事にしてもらっていたと思う。いつの間にか変わってしまったけれど。

でも、どうせもうすぐこの時間も終わる。ついにヒロインが現れたのだから。

殿下との婚約が解消されることは構わない。それが運命だしね。だけど、私は死にたくはないし、魔王復活のきっかけになるのもごめん。

お願いだから私に関わらないで、平和に愛を育んでほしいと本気で願っている。魔王復活なんて一大イベントは起きないまま穏便な精霊王の代替わりが終わること、私ができることも生き延びることだけが望み……！

だから私はひとつだけ、心に強く決めている。聖女様には必要以上に関わらない。嫌がらせや、ましてや命を奪おうとするなど……絶対にしない。

(お！メル、あいつ今日も来てるぞ)

不意に、頭の中に声が響く。

(ふふふ、よかった。教えてくれてありがとう、ロキ)

同じように頭の中で返事をした。

クラウド殿下に変わった様子はない。当然だ。この声は、私にしか聞こえていない。

——ロキ。

私をメルと呼ぶ声の主。小さな頃は姿も見えていた。手のひらくらいのサイズしかない、白銀の髪に銀色の瞳が美しい不思議な存在。彼は気がついたときにはもう側にいた。ロキは、自分を『精霊』だと言った。私の側はとて心地いいと笑い、いつも周りをふよふよ飛んでいた。

精霊はどこにでもいるとされている。ただ普段は見えないだけ。私達人間の魔力や、魔法を使つた後に出る魔力の残滓を取り込んで生きていられるらしい。どういう因果関係なのかは詳しく分からないけど、もしも精霊がいなくなれば一切の魔法も使えなくなるんだとか。

私にはロキの姿が見えたけど、それはちよつと特別なんだって。ロキのこともゲームにはなかった。だから、安心して心を許せるの……。

治療の力を失った頃、ロキの姿が見えなくなった。だけど声だけは今も聞こえている。こうしていつも側にいてくれるのは分かる。何があっても、いつでも、ロキは側にいてくれた。ロキの存在は、死んだ母にしか打ち明けていない。

お母様は驚き、他の人にはロキの姿が見えていないこと、声も聞こえていないことを教えてくれた。そして、ロキの存在は、ロキのことが見えない人には内緒にしようと言った。

いかにそれが精霊と言えど、人と違うことで私が周りから奇異の目で見られることを危惧していたのかもしれない。

そして、もうひとつ、私を裏切らずにいてくれる存在……。

沈黙の多い気まずいお茶会が終わり、馬車に戻るふりをしてそつと王宮の裏手の側にある森の入り口に向かった。少し森の中に入るとそこには小さな泉のようなものがある。

そこに、その生き物はいた。

「お待ちせ、黒い狼さん」

その獣が、泉を覗き込んでいた顔をゆっくりと上げる。

真っ黒で艶やかな毛並み、金色の輝く瞳。体の大きなその狼こそ、小さな頃に私が助けた、あのボロボロだった獣だった。この狼はあれからずっと、こうして訪れる。

数少ない、私を裏切らない存在……飽きもせず、ただ会いに来てくれる。

小さな黒い狼を助けた時のことは、今でもよく覚えている。

あの時、怪我の癒えた狼はすぐに身をひるがえ翻し去っていった。その後私はもちろん護衛やサラーにうんと叱られたけど、それでもあの美しい獣を助けられたことに大満足だった。

ボロボロの体を抱きしめ血濡れになっていた自分の服やストールは、路地裏から出る前に浄化魔法で綺麗しておくのも忘れなかった。おかげで何をしていたのかはバレずに済んだのよね。

黒い狼が人目を忍んで会いに来るようになったのは、それから少ししたこと。

(メル、この間助けた黒い狼がお前に会いに来ているぞ)

初めてロキにそう教えられた時は本当にびっくりした。

このセイブス王国では、食用の家畜以外の動物は基本的に嫌われる。もしも誰かに姿を見られてしまえばきつと無事ではいられない。国に対して許可申請していない動物は全て駆除対象なのだ。

私はもちろん、もう来ないようにと何度も言い聞かせた。それでも狼は数日すると現れる。仕方ないから強硬手段！ ロキに訪問を教えられても会いに行かなかった。

それでも黒い狼は会いに来た。狼が諦めるより、私が折れる方が先だった。それからずっと、こっそりと、不思議な交流は何年にも渡って続いている。

「わっ！ ふふふ！ くすぐりたいわ」

数年で小さかった狼もすっかり大きくなった。今では私が全身で抱き着いても余るくらいすっごく大きい！ その大きな体がすりすりとの擦り寄り、もふもふとした毛並みが手や頬をくすぐる。

ああ〜！ もふもふだわ……本当にもつもふふ！

いつも通り全身で抱き着き、ふわふわの体を撫でまわした。前世を思い出して初めての触れ合い。もふもふは尊いという感覚を思い出してこの大きな体に包まれると、より強く幸せを感じる。

「はあ、癒し。本当に癒し。たまらない。幸せ」

(メル、すっげーだらしな顔してるぞ)

ロキの呆れた声は無視。どうせ誰にも見られないのだから。

抱き着かれ、撫でまわされている狼は心地よさそうに目を細め、されるがままに身をゆだねてくれる。一応バレることを恐れているのか、声はほとんど出さない。

こんなに可愛くてもふもふは幸せを与えてくれるのに、どうしてこの国はこれほど動物を嫌うのかしらね？

——隣国、アーカンド。そこは獣人たちが暮らし、治める国。獣人たちは動物たちと密接に暮らしていると聞く。セイブス王国が動物を嫌うようになったのは古く昔のこと、アーカンドとの関係が悪化してからのことらしい。

政治的な理由からアーカンドのものや彼らと縁の深いものを拒絶するようになり、いつしかそれ

が国民全体の当たり前の価値観として刷り込まれていった。

はつきりそうだと教えられたわけではない。だけど、妃教育で学んだことを自分なりにつなぎ合わせていくとそういう事実<sup>じじつ</sup>に辿り着いた。ちなみに直接的に教えられる内容はもつと単純<sup>かんたん</sup>で偏<sup>かたよ</sup>っている。

『獣人は野蛮<sup>ひきょう</sup>で卑怯<sup>ひきょう</sup>で悪意にまみれた亜人種であり、友好を築くことは不可能。獣人に追従する獣と共存することもまた、人間としての尊厳を捨てることと同義である』

王家が、家族が、家庭教師が、そして人々が神の慈愛を求めて通う教会がそう教えるのだ。

「だけど私は、そんなことはないって知ってるよ……」

私の眩<sup>つぼや</sup>きに、側に座り、大人しく頭を撫でられていた黒い狼さんが不思議そうに顔を上げる。金色の瞳が瞬<sup>まばた</sup>いていてとつても綺麗だ。……こんなに綺麗で優しい生き物との共存が、人間としての尊厳を捨てることになるなんてありえない。

「獣人さんって、どんな人達なんだろう……」

狼が大きく体を起こす。小さな声で優しく鳴いて、頭を擦りつけてくる。これは「そろそろ帰るね」の合図だ。私はもう一度その大きな体を、両腕を目一杯広げて抱きしめた。

「優しい狼さん、またね」

狼は森の中にすぐに消えた。

これは推測だけれど、あの子はアーカンドから来ているのではないかと思う。

一見恐ろしくも見えるあの大きな狼がこんなにも優しいのだ。あの子と共に暮らす獣人族が、教えられている通りの種族であるとはどうしても思えない。

おまけに……攻略対象にも獣人がいる。そのルートはプレイしていないから、内容は全く知らない。私はサブエピソードなどを楽しむタイプでもなくて、淡々とメインルートをこなすだけだったからなあ。

でも多分、将来は聖女様が獣人と人間の懸け橋になるんだろう。現実的に獣人や動物たちと共に生きていく未来がすぐそばにある。

その時に……ゲームではすでに死んでいた私は、どこでどう生きているだろうか？

「いつか、アーカンドに行ってみたいな」

狼と会っていたなんて万が一にもバレないように、全身に浄化魔法をかける。治癒魔法はうんともすんとも発動できなくなっただけ、実は簡単な魔法くらいならば今でも使えるのだ。

というか一度は全然使えなくなっただけ、必死で練習したらまた使えるようになった。

無能無能と言われる中、そんなことはなんの意味もないので誰にも言っていないけど。それに黙っているとこういうときに便利なのだ。証拠隠滅いんめつにもってこい。絶対にバレないってこと。ふふふ！

(……お前はそのうち、嫌でもアーカンドに行くことになるよ)

「えっ？ 何か言った？」

(いや、なんでもないよ！ そろそろ戻らないと、迎える馬車が来るんじゃないのか?)

そうだった！ 頭の中でロキにありがとうと伝え、そっと王宮の方に戻る。さりげなく人目につかない辺りで認識阻害の魔法を解いて馬車に向かった。



「兄上、どうして兄上はメルディーナ様に冷たく当たるのですか？」

クラウスの執務室で、第二王子のカイルが不満そうに兄に尋ねていた。

「お前の心配することではないよ」

「でも、メルディーナ様がおかわいそうです！ いつもすごく寂しそうなお顔をしています」

カイルはクラウスの年の離れた弟であり現在十歳の少年だ。カイルはメルディーナを姉のように慕い、よく懐いていた。婚約者であるクラウスよりよほど仲良くしている。

「噂のように、メルディーナ様が治療能力を失われたからですか？ そんなものなくともメルディーナ様は聡明で優しく、素晴らしいご令嬢なのに……」

言っていることは大人ぶっているが、カイルは口を尖らせ子供らしく不満を全開にさせている。そんなカイルの様子にクラウスは苦笑し、ため息をついた。

「そういうことじゃないよ……カイル。私だって、彼女ともっと仲良くしたいとは思っている」

「でも、それならどうして……」

カイルはそれ以上言葉を続けられなかった。兄の顔があまりにも寂しそうに見えたからだ。

「だって、メルディーナは……きっとこの婚約を——」

「？」

クラウスの独り言は、カイルの耳に届く前に空気に溶けて消えた。



今から二年ほど前に、王宮で予言された『精霊王の代替わり』。精霊王とは、全ての精霊の親のような存在で、生き物が暮らしていれば必ず生まれてしまう瘴気をその身に集め、世界を浄化してくれている偉大なる存在だ。

古くからの言い伝えでは、精霊王の代替わりの時代には、多くの場合で魔王が生まれるとされている。そして魔王の脅威を払うために、その時代には聖女様が現れると言われていて——今回もまた、予言の中には聖女様のことも含まれていた。

曰く、温かなピンク色の髪を持つ乙女であること。

曰く、類まれなる聖属性魔法を操ること。

曰く、右の鎖骨の下に独特の痣が浮かび上がること。

そして、予言通りに聖女様は見つかった。

ちなみに、ゲームではこの予言がプロローグとして語られる。

聖女の証の痣が浮かび上がり、王城へ謁見に上がったところからがストーリーのスタートだ。

ゲームのスタートの瞬間、私は前世の記憶を取り戻したってこと。



「姉上、今日は王宮へ上がる日だろうか？」

最近のエリックは機嫌がいい。

なぜなら……。

「ご苦労なことだね。どうせこの婚約ももうすぐなくなるだろう。今日もリリーとクラウス殿下の仲睦まじい姿を見に行くようなものなんだから」

「エリック、聖女様のお名前を敬称もなく呼ぶなんて……」

「うるさいな、リリーにそう呼んでくれと言われたんだ！ ああ、姉上には分からないだろうね、あの優しく清らかなリリーのようにはなれないんだから」

聖女様であることが正式に確認された、リリー・コレイア男爵令嬢。ゲームのヒロイン。

ピンク色の髪、可愛らしい容姿、予言通り聖属性魔法を使うことができ、右鎖骨の下の痣も無事に確認されたらしい。

そして、今セイブス王国ではある噂が広まっている。

「クラウス殿下がついに最愛の人を見つけたんだ！ おまけに相手は聖女様である可憐なリリー。姉上はせいぜい、婚約を破棄される心の準備でもしておくんだね」

これこそが、エリックが上機嫌である理由。

今この国は聖女様出現の興奮と、彼女とクラウス殿下の恋物語でいっぱいだった。

ちなみにエリックは十五歳でありながら王宮に併設された魔法院への出入りを許されている。正式に入省できるのは十七歳から。さすが天才！ 多分、そうして王宮を通るときにリリー様と会う機会があるんだろう。

エリックもすでに聖女リリー様に夢中になっているように見えるけど、私とクラウス殿下の婚約がなくなるの方が嬉しいらしい。

とつくに分かっていることだけど、あまりの嫌われっぷりでお姉ちゃんはやっぱり悲しい。

王宮に着く。いつもエスコートに来てくれていたニールも最近はずを姿を見ていない。あれはただの厚意であってそれに甘えさせてもらっていただけなのだけど、ちょっとだけ落ち込んでしまう。彼はどうやら、聖女様に側にいるようにと望まれているらしい

一人で馬車から降りていると、たまたま通りがかった衛兵が慌てて駆け寄り手を貸してくれた。

「申し訳ありません、ありがとうございます」

「い、いいえ！ とんでもございません！ あの……よろしければ私がスタージェス侯爵令嬢のエスコートをさせていただいてもよろしいでしょうか!？」

「まあ……でも、ご迷惑ではございませんか?」

「とんでもありません！ どうかお任せください」

まるでエスコートをしたいかのような言い方に、心が温かくなる。

今、私の立場はとても危うい。以前からクラウス殿下に蔑ろにされていることは知られていたけど、聖女様が現れてからはあからさまな嘲笑ちやうしやうを向けられることも少なくはない。

この衛兵はとても優しい人なんだと思う。私に気を遣って、お願いしやすい空気を作ってくれている。久しぶりに向けられる優しさが嬉しい。

「では、どうぞよろしくお願いいたします」

「……はい！」

笑いかけると、目をそらされてしまった。……ちょっと調子に乗りすぎたかもしれない。

——メルディーナはまさか衛兵が自分を慕い、照れているだけだとは気づかない。

心優しい衛兵のエスコートで、いつものようにお茶会の準備が整えられた庭園に向かった。これまたいつものように、クラウス殿下はもう席についていた。

「……殿下だけではない。

「うふふっ！ クラウス様ったら、そんなに褒められるとリリーは恥ずかしいです」

華やかな声が聞こえる。

実は、今日が初めてじゃない。むしろ最近はずっとそう。ずっしりと気持ち重くなる。

（大丈夫か、メル？ 別に嫌ならいなくてもいいんじゃないか？）

私の心が鉛なまりのようになったのを感じたのか、ロキの心配そうな声が聞こえる。

（大丈夫よ。それにそういうわけにはいかないのよ……でも、ありがとう）

ここまでエスコートしてくれた衛兵にお礼を言ってお別れる。すごく気まずそうな顔をしていてちよつと申し訳なかった。

「ごきげんよう、殿下、聖女様」

そつと近寄り、挨拶あいさつした。

クラウス殿下より先に、驚いた顔のリリー様が反応した。

「あら！ メルディーナ様！ 今日はどうされたんですか？」

どうされた、って……咄嗟に言葉が出なかった。

どう答えたものかと迷う。「元々私と殿下の時間なんですけど」とは言えないし。そもそも聖女様とあまり関わりを持ちたくないんだって……。

視線をさまよわせると殿下と目が合ったけれど、バツが悪そうに目をそらされるだけだった。

側にはニールもいた。固まっている。控えている侍女や護衛もみんな微妙な表情。

リリー様だけがきよとんと心の底から不思議そうな顔をしている。

その表情を見ていると、そういえばと思い出した。

そうだ、ゲームの中ではここで悪役の私は激怒するんだ。

『どうされた、ですって？ 殿下が迷惑していることも気づかずに我が物顔で隣に座り、いかに聖女様と言えど無神経なのではなくて？ そもそも私は殿下の婚約者。その私の前で殿下にそのような態度……聖女であるからと清廉せいれんだというわけではございませんのね』

そして、私は苦々しい顔をした殿下に不敬だと叱られる……。

『そもそもリリーを隣に望んでいるのは私だ。君のような無神経な女が婚約者など……いや、今は止めよう、リリーの前だ』

——ああ、そっか。もうすでに私は邪魔者でしかないんだ。

今更ながらはつきりとそう自覚すると、思わず笑いが出た。私の急な笑顔に殿下が一番びっくりしていた。

というかゲームの私、ずーっと殿下に冷たくされてきたのに、本人がいる前でよく婚約者面むらで聖女様に突つかかれたわよね……どうかしてるとしか思えないんだけど……。

さつきロキに「そういうわけにはいかない」と言っただけだった。でも、なんかもうどうでもいいや。一瞬で気力がなくなつた。どうせ婚約はなくなるだろう。ヒロインである聖女様が相手なんだもん。正当な理由が出来たってこと。だから、あと少しくらいこの辛いだけの交流も頑張ろうと思つてた。

でも……どうせあと少しなら、もう頑張るの止めてもいいよね？

「いえ、所用で王宮へ参りましたのでご挨拶だけでもと伺わせていただきました。楽しい時間を中断させて頂いて申し訳ありません。それでは私はこれで」

礼を取り、顔を上げると同時に踵を返した。

ちよつとはしたくない行動だけど、お優しい聖女様が万が一「あなたも一緒に」なんて言いだしてはたまらない。

胃がしくしく痛んで、後ろからいくつもの針で刺されているような気分だった。まさに針の筵むしろってやつね。あれ？　ちよつと違う？

とにかく、私は惨めに逃げ出したのだ。



スタージェス邸の自室に戻った私は、クローゼットの奥にそつと隠した荷物を引つ張り出す。

「生きていける方法と居場所を、確保しなくちゃ……」

シナリオ通りに処刑されずとも、そのうち婚約は解消されるだろう。

それがいつになるか……どう変わるか読めない以上、早まる可能性も捨てきれない。そのときは、できれば貴族籍を抜けて市井しせいで生きていきたいな。どうせ無能として必要とされていないのだし、この次にろくな縁談も望めはしないだろうし。

記憶がよみがえる前から婚約が解消になる覚悟はできている。だから、そのための下準備をずつとしてきたのだ。

王都の、石畳が美しい広場と、そこを取り囲むように立ち並ぶたくさんのお店。その一角、あまり目立たない隅の方に小さな植物店がある。

そしてその小さな店のさらに奥の一角が……今の私の一番の居場所。

「ディナ！ 回復薬は出来てるかい？」

「回復薬は全部終わって、頼まれていた風邪薬を作ってるわ」

「さすがに早いな……」

ディナは私のここでの名前だ。本当の名前も身分も隠して、隠れて屋敷を抜け出してはここにお世話になっている。店主のピクターさんが私の薬作りの師匠だ。最近では私の作る薬はどれも街の皆に評判で、こうして来られるときに出来るだけ作り置きしておくようになった。

今自分がいる場所以外で生きていく道を探そうと思って、最初に頭に浮かんだのはもう失った治療の力。どこかで『出来たはずのことを、代わりに何かで補いたい』という気持ちがあったのかも。他にも選択肢はあったはずだけど、その結論には簡単にたどり着いたと思う。

薬師くすりしになろう。治療が使えないのなら、他の方法で誰かを癒せるように。

最初に本を読んだ。葉草の基本的な図鑑から始めて、葉の調合の基礎、薬学入門、初級から中級、どんどん難易度を上げて、葉草や治療に関する神話なんでもまで片っ端から読んだ。本の知識の誤りや不親切な表現、『間違っではないけど、それだけが正しいわけじゃない』なんて、本に載っていないようなより詳細な内容はロキが教えてくれた。

次に、実際に葉草を探しに行ったりした。私は愛されない子供だから、屋敷を抜け出すのも難しくはなかった。食事はきちんと与えてもらえたので、昼食後から夕食前までの時間に戻ってこられる距離限定。近場で葉草が自生している場所を把握していくのは結構楽しかったな。多分普通の貴族令嬢には絶対に出来ない体験だし。ちよつと冒険みたいだった。その途中でできたちよつとした傷に、見よう見まねで作った葉を試したりもした。

そして、次の段階として私は協力者を探し、出会ったのがこの植物店を営んでいるビクターさんだった。



植物店の奥にある調査室。そこで作業する小さな背中を見ながら、ビクターはふうっと息をついた。

ビクターの亡くなった祖父は元宮廷薬師だった。その祖父が城での仕事を辞して始めたこの植物店。最初は薬草特化の専門店だったが、客のニーズに応じていくうちに薬草以外の植物も扱うようになっていった。祖父が亡くなった後は自分が継いだ。父は全く別の仕事をしている。

そこに、目の前にいるこの少女が突然現れたのは二年前。精霊王の代替わりの予言がなされた少し後だった。

「どんなことでもします。私をここで働かせてください。薬草の作り方を学びたいんです」  
ビクターの家は爵位のない平民だが、実は代々緑を司る精霊の加護を頂いていた。そのため特に優秀な者は祖父のように宮廷にも務めることが出来た。

すぐにメルディーナが貴族であることは分かった。熱心に頭を下げるメルディーナに、彼はひとつの種を渡す。

「一週間で以内に、この種を咲かせて綺麗な花を俺に見せることが出来たら考えてやるよ」  
渡したのは、とても珍しくマニアックな花の種。メルディーナでも知らないものだった。

実はその種は普通に育てるだけではまず咲かない。土魔法を得意とする者や、何年も植物を専門にしている者でも咲かせられる者はほんの一握りだろう。技術だけで咲かせるのではない、精霊の助けがなければ咲かない特殊なものだった。

昔はそこまで特別な花ではなかったらしい。何かコツがあるのかもしれないが、ビクターもそれが何かを知らなかった。貴重なものであることから、種だけはせめて劣化しないように保存魔法をかけ大切に保管していたが、長い年月の間に何人かがその育成に失敗し、その残りもあと数粒というところ。見た目はまるでクルミのようなころりと大きな種。

メルディーナの美しい金髪と鮮やかな紫色の瞳を見て、貴族がお遊びで訪ねて来たと思ったのだ。  
(馬鹿にしやがって。お貴族様の気まぐれに付き合ってるほど暇じゃないんでね)

この美しい少女はきつともう二度と来ないか、もしまた来ても咲かない種を片手に激怒してやっ

てくるだろう。その時はどう追い返してやろうか。

予想に反してメルディーナは再びやってきた。ただし、それは約束の一週間もたっていない、ほんの五日後のことだった。

暗い顔をして現れたメルディーナに、ビクターはため息をつく。

（なんだ、あと二日も残してギブアップか？ ま、賢明な判断だな）

しかし、お客さんを見送った後にもう一度店の外に行き、戻ってきたメルディーナが手にしている物を見て驚愕する。彼女が持ってきたのはひとつの鉢。その中で、たくさんの白い花がこれでもかと美しく咲いていた。

「は……？」

（本当に、咲かすことが出来たのか……!?!）

書物でしか見たことのない花の姿に、驚きに言葉を失うビクター。しかし彼はさらに驚くことになる。

「あの、この花って、恐らく特別なものですよね？ どうしても認めてほしくて、約束の一週間後までにできるだけたくさんのお花を咲かせようと頑張ったんですが……」

おらずとメルディーナが差し出したのは、両手いっぱい種だった。

「成長速度が異常に速くて。花は咲くのですが、すぐに枯れてしまうんです。すみません、最初の種はすでに花を咲かせた後種を残して枯れてしまい、この花はその時の種をまた育てて咲かせたものです……これでは認めてはもらえないでしょうか？」

一週間を待っていると、また全ての花が枯れてしまうと思ったのだと言いながら、もう一度頭を

下げるメルディーナ。ピクターには信じられなかった。

「……この花の種はすごく高価でなかなか使えないが、とてもいい回復薬になるんだ」

（そして、花を咲かせるのも難しければ、どうにか咲かせることができても滅多に種を残せない、本当に気難しいと言われる植物なんだ……）

「は、はは……！」

もう、笑うしかなかった。

不安そうにこちらを見つめるメルディーナに、ピクターは姿勢を正して向き直る。

「君、魔法は使えるのかい？」

「え？」

「魔法じゃなくてもいい。この辺じゃあその髪の色と瞳は目立つから、出来れば色を変えてくるように」

「！」

遊びだど心の中で笑った五日前の自分を殴りどばしてやりたい。この少女が自分の態度にへそを曲げて「もういいや！」となるような人でなくて本当に良かった。

目の前のこの少女は……よほど精霊に愛されている、天才だ。

その日からピクターはメルディーナの師であり、良き理解者になる。そうならない選択肢など、もう存在しなかった。その後、彼女がよりによってスタージェス侯爵家の令嬢という、思った以上に高貴な存在だと知ることになっても、二人の関係は変わらなかった。

そうしてメルディーナは貴族令嬢である自分とは別の、市井での居場所を得ようとしていた。



ビクターさんに言われた通り、屋敷を抜け出しディナとして活動するときには髪と目の色を変えるようにしている。前はこっそり調達したちよつとぼろいローブを着て、そのフードを頭からひっかぶるだけだった。それで十分だと思っていたのだ。

蔑ろにされる時間を積み重ねていって、どこかで自分が透明人間に近い存在とでも感じていたのかも。ローブやフードも服の質を隠すくらいに気持ちだったし。そこまで豪華じゃなくても侯爵家で購入する物、質は段違いにいい物だからさすがにまずいかなと思っくくらいの判断力はあった。だけどそれだけ。それでバレないと本気で思っていた。

今日も髪の色と目の色を、よくあるこげ茶に見えるように調整する。見た目や性質を変えるのは高度な技術が必要になるものの、魔力自体は少なくて済むので、今の私にもできる。なんて、実は結構練習したんだけどね。

店に向かうために、いつものように通りを歩いていたら時だった。

（——メル、隠れた方がいいかもしれない！）

「えっ？」

馬鹿な私はロキの声に、咄嗟に顔を上げて視線を巡らせてしまった。道の反対側に数人の騎士がいて、その中にニールの姿があった。目が合う。こちらに向けた顔が驚愕に染まった。やばい。

ちよつと差し掛かった曲がり角でなるべく何でもない風を装って曲がり、騎士たちがいたあたり

から死角に入った瞬間に走った！

顔を変えることは今の私の魔法ではできなかった。

ニールにバレたかもしれない。ディナとして植物店で働いていることはバレたくない！ 大事なもうひとつの私の居場所。少なくとも、婚約解消がすんで私が無事に平民として生活できるようになるまでは……。

(メル！ まだ姿は見えてないけど、追いかけてきてる！)

急いで次の角も曲がる！

ニールは優しくて注意深い性格だから、私かもしれないと思った時点で何をしているのか確かめたがるのは想像がついた。仮にも侯爵家の令嬢で王子の婚約者だもんね。護衛も侍女もつけずにこんな格好で一人で歩いてるなんて普通ではありえないことなのだ。

(だめだ、まだついてきてる！)

どうしよう、逃げ切ることが出来ればもしも次に会った時に何か聞かれても、しらを切ればニールの勘違いで押し通せるはずだ。けれど、捕まってしまうばそうはいかない。

「……っ!?」

(メルっ！)

次の角まであと少しというところで、暗い路地裏に引っ張り込まれた。

真っ黒なローブ。頭一個半分ほど高い背丈。フードを目深まぶかにかぶって顔は見えない。その得え体のしれない人物に壁に押しやられている。思わず声を上げようとしたところで口を塞ふさがれた。

「しーっ、少しだけ我慢してください」

何を！

逃げ出そうにも、大きな体に抱き込まれるような体勢では私が少し暴れようとも大した抵抗にならない。

「大丈夫、こうしていればバレません」

そう言われた瞬間、口を塞ぐ手がとても優しいことに気付いた。よく考えれば私に危険があるならばもっとロキが騒ぐはずだけど、今は静かだ。

この人……私が逃げているのに気づいて助けてくれただけ？

(メル、今通り過ぎていったよ)

ロキの声が聞こえた瞬間、口を塞いだ手が離れていった。

「もう大丈夫そうですね。突然すみませんでした。驚かせてしまいましたね」

「いえ、あの……ありがとうございます。助かりました」

見えている口元がゆるりと笑みを形作る。

「あなたの助けになれたのならよかったです。——それでは僕はこれで。あなたはここでもう少し待つてから行かれるといいでしょう」

その人がふわりと身を翻すと、なぜかほんの少し懐かしいような匂いがした。

「あの！ あなたのお名前を覚えていただけませんか？」

咄嗟に、立ち去ろうとする後ろ姿に声を掛ける。

どうしてだろうか、知らない人に親切を受けて嬉しかったからかもしれない。

「……次にお会いしたときにお教えします。それでは、また」

その人はそう言うと、そのまま去ってしまった。

(メル、もう騎士たちはいないみたいだ。そろそろ行こう)

それから助言通りに少し待ち、ロキの声の通りに路地裏から抜け出す。

しかし、いつも通らない道に入り込んでいたので、自分がどこにいるのかいまいち分からない。とにかく大きな道に出そうなる方を目指していると、どんどん辺りが不穏な空気になっていった。そのうち少し開けた広場に出たけれど、明らかに様子がおかしい。

「ここって……」

(貧民街の入り口みたいだな)

ここまで来て気付いたけれど、実はこの辺には来たことがある。ビクターさんと一緒に一度だけ回復薬を配りに来たのだ。確かに貧困層が集まった地域ではあるけど、それでもそれなりに清潔で、よくある浮浪者や人らしく暮らせない人がいるほどの場所という印象ではなかった。

奥の方に井戸がある。そこがこの一帯に暮らす人達の生活の要だ。

吸い込まれるようにそちらに向かった。数人が蹲うつすくまったり、横になったりして呻うめいている。

ぐったりした男性に付き添うように側にいる女性に、何があつたのか尋ねた。

「井戸の、水が……水が、瘴気に冒されて……」

井戸が？ それじゃ、この人たちは生きていけなくなる……。

「もう、四日も井戸が使えなくて……数人が耐えられず水を飲んだんです。そしたら、こんなことに……」

女性は消え入りそうな声で続けた。

四日も……！ 貧民街の情報はほとんど外に出ない。そもそもここに普通の人は来ないのだ。王宮までこの現状はきつと届かない。

井戸の……水の、浄化なら……私にもできるだろうか？

試しに、井戸に近づいてみる。

瘴気が濃いと体に異常をきたしたり、感情が不安定になる、暴力的になるなど、精神的にも様々な症状がでることがあると聞いた。

井戸の縁かぢに手をかけて、ぐいっと頭を突っ込むような体勢で覗き込んでみる。

……とりあえず、気持ち悪い感覚もないし、具体的に頭痛や吐き気がするなんてこともない。そんなに強い瘴気じゃないのかな？ 側で男性についてじっとしている女性の方に振り向く。

「どうしてこの井戸が瘴気におかされていると分かっていたんですか？」

見た目も異常はないし、正直私にはさっぱり分からない。先ほども色々答えてくれた女性に聞く、簡潔な答えが返ってきた。

「魔石ませきが……使えなくなつたから」

彼女が指差したのは井戸の屋根の内側の部分。覗き込むと、そこに確かに水色の魔石が埋め込まれていた。

この国の貴族は魔法が使えるかどうかが重要になる。もしも使えない場合は無能とされるけれど、それでも『使えない』というのはかなり大きな表現で、本当に全く使えないのはごく稀まれなケース。ほんの基礎の魔法は使えることがほとんどだ。

お兄様も少しの飲み水を出したり、火をおこしたりなどの魔法は使える。私はお兄様よりもう少

し使える。どちらにせよ、これくらいなら貴族的には『使えないのと一緒』だということ。

そして、本当に全く使えない者も多い平民たちは、魔石の力を使って生活するのだ。

この魔石は……井戸の水を清潔に保つための効果と、地下の水脈とこの井戸を繋げる役割を担っている。魔石が壊れない限り水が物理的に汚染されたり、病気がここから蔓延するなんてことは起こらない。

そして水が瘴気におかされた今、魔石の力が作用しなくなった時点で地下の水脈との流れは絶たれているはず。井戸に新しい水が入ってくることはないし、この水が他の場所に流れることもない。よく出来ていると言えば出来ている。

この場所を見捨てれば、他に問題が飛び火することはないんだもの。

「確かに、魔石はまだ壊れていないわね。そういうことね」

経年劣化や魔石に込められた魔力が失われる以外で作用しなくなることはあまりない。その少ないパターンのひとつがこの女性が言ったように『瘴気におかされた場合』だ。

井戸の外に転がっていた水汲み用にロープに繋がれた桶おけを井戸の中に垂らし、試しに水をくみ上げてみる。上から覗き込んだだけでは分からなかったけど、ほんの少し黒いモヤのようなものが水から漂っていた。

(瘴気で間違いないな)

ロキも言うならまず他の理由は考えられないだろう。

「ひっ……!」

側で見ていた女性がモヤを目にしたのか、小さく悲鳴を上げた。

——浄化。

手をかざし、魔力を注ぐ。試しに自分の体にいつもかけているように浄化をかけようとするも、あまり効果はなさそうだ。まあそんなに簡単には払えないわよね……。

思わず大きなため息をつくとき、漂うモヤがほんの少し揺らいだ。

「えっ？」

もう一度、今度はふうーっと息を吹きかけてみる。やっぱり少し揺らぐ。

……瘴気って、こんな物理的な力の影響を受けるものなの？

意外な事実だ。知らなかった。空気中にも多少の瘴気があると聞くけど、こうやって少しでも目に見える形で集まっているのはあまり見たことがないしね。

「それならこれはどう？」

収束——！

もう一度手をかざし魔力を込めると、私の手のひらに向かって黒いモヤが渦を巻き、少しずつ螺旋を描きながら集まっていく！

そのまま続いて、——浄化！

そして、集まった瘴気の黒いモヤは私の魔法に合わせて消えたのだった。

「いけそうね！ これを井戸の水全体に応用すれば……」

再び体を起こし、井戸の上にかざすように両手を広げる。ちょっと大変そうだけど……。

収束——！

私の魔力がまるで磁石になったかのように、見えないほど奥の方で漂っていた黒いモヤが吸い込

まれるように流れを作りながら上に吹き上がってくる！ 集中力を切らさないように丁寧ていねいに……集めて、集めて、そして、

浄化……………」

——成功はしたけれど、さすがに井戸の水全部を一度に浄化するのは無理だった。自分の弱い力でもどかしい。きつと聖女様だったらこんなの簡単に払っちゃうだろうな……。

何度か繰り返し、どうにか全てを浄化するころには随分時間が経ってしまった。井戸の側で苦しんでいた人達にも浄化をかけ、たまたまカバンに入れて持っていた回復薬を渡す。まだしばらくは苦しいだろうけど……私にはこれが限界だ。治療が使えればもっと楽にしてあげられたのに。

少し顔色が良くなり眠った男性の側で、ずっと見ていた女性がこちらに向かって跪ひざまずいた。

「ありがとうございます……！ ありがとうございます、ございます！」

「そ、そんな……」

思わずうろたえ、少し後ずさりしてしまった。

ふと気がつくと、彼女だけではない。いつの間にか貧民街の住人たちが何人も集まり、私が井戸を浄化するのを見ていたようだった。私を囲むように立っていた人々が女性をらに倣い、次々に跪く。

それぞれが、感謝や祈りを口にしながら。

「!? 顔を上げてください！ 私は少し井戸の水を浄化することが出来ただけで……治療も満足にすることが出来なかったのに……!」

なんとか頭を上げてもらったけれど、そのほとんどの人の目には涙が浮かんでいて。無能と言われる私でも、こうやって誰かのほんの少しの助けにはなれるんだ……そう心が温かくなったのだっ

た。



メルディーナは知らない。

『井戸の水を浄化すること。それがどんなに難しいことだったのか。』

知らないままに、メルディーナは自分が人の役に立てることに喜び、またひとつ自分にもできることが増えたと希望を抱いた。ここで、自分は生きていける、誰かを助けながら居場所を作っている。そんなふう<sup>ふう</sup>に思っている。

それからしばらくして、『市井に現れた聖女様の話』があちこちで囁<sup>ささや</sup>かれるようになる。